
変人達と僕×・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

・・・暴走したのを恥ずいけど貼る。

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変人達と僕×・・・調子に乗つて暴走したから見ないで！

【Zコード】

Z4388Q

【作者名】

・・・暴走したのを恥ずいけど點る。

【あらすじ】

はい。作者の魂魂さんがキャラだけは貸してくれるというので（手は受験で忙しいそうで）、僕（も受験生）がやらせてもらいました。

簡単に言います。あっちの方のファンの人は見ない方が良いと思います。はい、ごめんなさい。ついでに山も意味も落ちもありません。何となくです。

(前書き)

はい。作者の魂魂さんがキャラだけは貸してくれるとこ（う）ので（手）は受験で忙しいやつで。）、僕（も受験生）がやらせてもらいました。

正直言います、けつこうひどい作品になっています。

魂魂さん、これやっぱ魂魂さんが書いた方が良かつたですかね……。

時間軸は「想像にお任せします。」亞空間でも何でも。

ぶつけやけ両方とも舞台は同じような町だし時代は変わらないし

～一応両方のキャラ紹介～

・調子に乗つて暴走したから見ないで！

春風凜 小学生

ヤンデレの口リ幼女。だが幼いだけあってそんなに病んではない。

黒藤謙太 中学生

ヘタレ中学生。口先と正義感は一丁前。現実に押しつぶされやすいタイプ。

・変人達と僕（あつたものを一部抜き出し）

篠原彩子（文中ではアヤコ） 高校生

重度のヤンデレ。薬局で売っている薬品を調合して新しいクスリを作るのが得意。

キスケを自分のものにするためにはどんな犠牲も厭わない、がセオリーの危険人物。

才原喜助 高校生

ツツコミ役。本編では空手を使ってかなり格好いいのだが今作ではただの人役に……。

正直、書くのが難しいから大して動けなかつたキャラ。

コラボつて難しいですね。

つてーかもーちょっとといったかもしません。

はい……。すみません〇丁」

注意) キャラ崩壊の危険性アリです

みなさん、闘いというモノを見たことがありますか？

今日は、そんな闘いのお話です……。

つてあれ？ 僕つてこんなしゃべり方だっけ？

……そうだ、今日知り合った友達の口調が移ったんだ。

その友達と今日は鍋を囲んでいる。今日は銘那と來未の二人が他へ泊まっているので、丁度一人分材料が余っていたのだ。それで、親交を深めるついでに家に呼んだのだが……。

「凛ちゃん、この黒い豆腐食べない？」

この茶色でボニー・テールの少女は篠原彩子といふらしい。どうもウチの凛とそりが合わないらしく……

「死ね」

「身体にいいよ？ 食べないの？」

「死ね。頼むから死んで……、つて煙出てる！？ 怖いちょっとそれは本気で勘弁してお願ひ！」

相変わらず険悪なムードだ。

はつきり言つて現在”も”修羅場である。

「さすがに今日会つたばかりにそんな暴言はない。たとえ相手が煙を出している豆腐を差し出してきても」

呆れたように咳くと、隣から声がした。

「いや、僕はその娘に会つた瞬間告白されたからね？」

俺の隣に座つている優しそうな顔の男子は才原喜助と名乗つていた。

まあ、両方とも滅多にないシチュエーションだけね。

「喜助君とワタシはずつとずつと前から運命の糸で繋がっていたの。アンタみたいにただ惚れただけじゃないよ？」

……どうも二人は犬猿の仲のようだ。

「別に運命とか信じないもん！ もう死ねばいいのに……」

「いらっしゃ、さすがに死ねは言い過ぎだ」

俺は、凛をなだめながら、どうしてこうなったのかを思い出していた……。

「あ、包丁買うの忘れてた」

凛がこう言い出したのは今朝頃。今日は休日だというのに他の一人は出かけて二人きりなので、行ってみることにした。

まあ、凛一人で行かせても良かつたのだが、今日発売のカードを買いたいのでついて行くことにした。

バスに乗り、ショッピングセンターに到着する。

店内に入つて家庭用品コーナー側とカード売り場の一手中に分かれた。

お手洗いの物を入れ、しばらく店内を散策していた丁度家庭用品コーナーに到着してしまった。

凛がいるかな？と遊び半分で覗いてみたら、二人の少女が口論していた。

「謙太君を守るための包丁なの！ 絶対に渡さない！」

「そう、アナタも愛する人の為なのね……。でもワタシが喜助君に媚薬入りの夕飯を作るのに必要な。だからワタシの物」

「媚薬つて……、無理矢理振り向かせた恋に意味があるのー？」

「そうね、この包丁はワタシが買うべきだよね？」

「そう。これは私の物だよ！」

言葉のキヤツチボールどころかドツチボールとなっている。

最早双方が聞く耳を持たず、口論ではない別の何かになつていて。このまま放つておくのはお店に迷惑だと考え、凛を引きはがしてちょっと引きずる

「なーにやつてんだ、凛」

「え？ あ、いや、争奪戦？」

凛はちょっと可愛くどきまぎしながら答えた。

「包丁ぐらい他の店でも買えるだろ？ ほら、行くぞ」

凛を引っ張りながら外へ出ようとすると、後ろから声がかかった。

「あ、あの、ありがと『ひざこま』す」

振り返ると俺と同じかちょっと上の歳のよつな風貌の男子がこちらに駆け寄ってきていた。

その後ろには凛と口論していた茶髪の少女もついてきていた。

「あれ？ 僕お礼を言われるようなことは何一つしていませんよ？」

「いやいや、口論を止めてくれたから。アヤコは一回あなると止まりにくいんだ」

アヤコと呼ばれた少女は霸氣だか殺氣だかをまとっているらしく、なぜかうつすらと黒いオーラが見えた。

そして彼女の睨んでいる先は……、案の定、凛であった。

しかも渡しておけばいいものをわざわざ引きずられながら精算までしたらしい、レジ袋を手に提げていた。

「さあ、その包丁を渡しなさい」

「嫌だ」

「いいじゃない？ 渡してくれたら彼を惚れさせるお薬あげるから」

「嫌だ」

「渡してくれないと……、溶かしきやつわよ？」

なんだか人間には使つてはいけないよつな言葉を使つていて、夜這いがされそうだつたり色々怖いのでこの会話は聞かなかつたことにしよう。話題をさしだすと変えよう。そうだ、今日は鍋の材料が二人分余つてたはずだ。よし、夕食にでも誘えばこの場は切り抜けられる！

「あ、黒藤謙太です。よろしく」

「歳原喜助です。」

「あ、あの……、夕飯、一緒に食べませんか？ 材料が余つてるので」

「え！？ 何で急に？」

仕方が無いじゃないか、身の危険を感じる会話をこれ以上聞きたくない！

「いや……、その辺は何となく？」

「「」は逆に僕が夕飯誘う流れじゃないんですか！？」

「ひして半ば強引に夕飯に誘つたのだった。

そして家に帰つて、アヤ「さんとあの少年をキッチンに招き、一緒に鍋を作つた。

途中で何か入れられていたが……、まあ食べなれば大丈夫だろう。

本当に、この時間は嵐の前の静けさとでも言つのか……、誰かが何かを企んでいる。そんな雰囲気であった。

そして鍋が完成、みんなで鍋を囲もう！ となつた直後に冒頭に至る……。

「凛ちゃん、この黒い豆腐食べない？」

アヤ「は見るからに怪しい黒い物体を箸でつまんで凛に差し出している

「死ね」

凛は見向きもせずに言つた。

「身体にいいよ？ 食べないの？」

と、アヤコが豆腐を近づけた時凛が急におびえだした。

「死ね。頼むから死んで……、つて煙出てる…？ 怖いちょっとそれは本気で勘弁してお願い！」

相変わらず険悪なムードだ。まあちょっとは和らいだとでも言つておこう。

にしても、アヤコつて娘、なかなか可愛いな……。

とにかく、凛の暴言だけはやめさせるべきだな。

「さすがに今日会つたばかりにそんな暴言はない。たとえ相手が煙を出している豆腐を差し出してきても」

「いや、僕はその娘に会つた瞬間告白されたからね？」

若干意味の分からないボケをかます喜助はみんなスルーする。

「喜助君とワタシはずつとずつと前から運命の糸で繋がっていたの。

アンタみたいにただ惚れただけじゃないよ？」

若干顔を赤らめながらアヤコは呟つ。

「別に運命とか信じないもん！　もう死ねばいいのに……」

「こらこら、さすがに死ねは言い過ぎだ」

「（ワタシ）私の愛を邪魔する奴は……、死ね！」

「ハモつた！？」

「ハモるな！」

凛とアヤコは見事にハモつたが俺と喜助はハモれなかつた……。

悔しい。

「もつかいツツ ノミハモらせるぞ」

「張り合わなくて良いから！」

暴走しかける俺を喜助が止める。

その後は鍋に媚薬が入つていて、アヤコと凛がバトルをしたりしただけで結局お開きになつてしまつた。

「また来て下さいね～」

結局喜助さんはツツ ノミについて意見交換しただけ。と何とも親父臭い会話で終わつてしまつた。

一方凛は……。

「べ、別にまた来て欲しいんじゃないからねつ！」

「あ、アンタの家なんかもう一度と行くものですか！」

両方ともツンデレになつてしまつた。

「ははは、二人ともツンデレになつてるつて。え、ツンデレ？　あ

……。」

ツンデレ、というワードに喜助が反応して青ざめた。

どうも過去にツンデレ関連でトラウマがあつたのだらう。

「頑張れよ！　喜助！」

喜助は青ざめた顔でこちらを振り返り、弱々しく頷いた。

「じゃ、じゃあまた」

「あ、待つて喜助君！」

そう言って彼らは歩を出した。

「じゃ～な～」

「ばいば～い」

俺たち一人は、彼らが見えなくなるまで子供のよつて手を振り続けた。

その後、気のせいか遠くの方で喜助の悲鳴が聞こえたような気がした……。

(後書き)

魂魂さん、加筆。修正。修正とこうかの創作をしてください。
……嘘です。言い出したペの僕がけやんとやります。

後に気付いたことで一つ。

謙太が喜助に敬語を使つてない！

……しかも喜助が優男になつてゐるし。

すみませんm(—_—)m

つてかさ、企画持ち出したのが12/27だぜ！？
俺遅いですねすみませんO-TL

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4388q/>

変人達と僕・・・調子に乗って暴走したから見ないで！

2011年1月26日23時40分発行